

 「物価が上がった」だけでは足りない

● 中級レベル

インフレを見るなら、「値段」のその先まで見てみよう

ここまで私たちは、工場ができ、仕事が増え、企業の売上や利益がどう動くのかを見てきました。

すると、次に出てくるのが、

インフレ

です。

インフレとは、簡単にいえば、

いろいろな商品やサービスの価格が、全体として上がっていくことです。

でも、

物価が上がった = 日本経済が復活した

とは限りません。

大切なのは、

****「なぜ値段が上がったのか」**

そして「値段が上がったあと、何が起きたのか」**

です。

 まず「値上げの理由」を考えてみよう

パンが 100 円から 120 円になったとします。

同じ 20 円の値上げでも、理由はいろいろあります。

小麦粉が高くなった。

電気代が上がった。

運送費が上がった。

働く人の給料が上がった。

あるいは、

商品がよく売れるようになり、需要が増えた。

こうしたさまざまな理由で、価格は動きます。

だから、

「値段が上がった」という結果だけでは、経済の状態は分からないのです。

 でました。「適正価格」

ここで今回の重要な言葉、

適正価格

です。
企業は商品を作るために、
原材料。
電力。
物流。
人件費。
設備。
などにお金を使っています。
それらの費用が上がったのに、販売価格をずっと同じにしていたらどうなるでしょう。
会社の利益が減ります。
すると、
社員の給料を上げにくい。
新しい設備を買えない。
人を増やせない。
研究開発も難しくなる。
つまり、
「安ければ安いほど良い」とは限らない
のです。

デフレ時代の考え方

長い間、日本では、
できるだけ値上げしない
ことが企業努力として評価される場面が多くありました。
企業は、
コストを削る。
効率化する。
人件費を抑える。
海外で生産する。
など、さまざまな方法で価格を守ってきました。
もちろん、安く良い商品を作ることは大切です。
しかし、原材料費や人件費が上がっても価格を上げられない状態が長く続けば、
企業の利益や賃金まで押さえられてしまう
可能性があります。

ここで「価格転嫁」が登場する

材料費が 10%上がった。

電気代も上がった。

人件費も上げたい。

このとき企業が、その増えた費用の一部を商品の価格に反映する。

これを、

価格転嫁

といいます。

たとえば 100 円で作っていた部品が、材料高によって 110 円かかるようになった。

販売価格をまったく変えなければ、企業の利益は減ります。

そこで販売価格も適切に見直す。

これによって、

会社が事業を続けられるだけの利益を確保する

わけです。

👉 でも、値上げすれば何でも解決するわけではない

もちろん、

「それなら、どんどん値上げすればいい」

という話ではありません。

値段が高くなりすぎれば、

消費者が買わなくなる。

別の商品を選ぶ。

企業同士の取引なら、別の会社へ注文が移る。

ということも起こります。

だから企業は、

****「利益を残せる価格」と**

「お客さんが納得して買える価格」**

のバランスを考える必要があります。

これが「適正価格」を考える大切なポイントです。

🏠 適正価格から粗利へ

適正な価格で商品が売ることができれば、

材料費などを払ったあとに、

粗利

を残しやすくなります。

粗利が残る。

↓

営業利益につながる。

↓

会社に使えるお金が増える。

では、そのお金を何に使うのでしょうか。

ここからが、日本復活を見るうえで重要です。

利益から「賃金」へ

会社に残れば、

社員の給料を上げる余裕が生まれます。

もちろん利益のすべてが給料になるわけではありません。

企業には、

設備投資。

研究開発。

借入金の返済。

将来への備え。

なども必要です。

それでも、

企業の利益が増え、その一部が賃金へ流れる

ことは、経済の循環にとって大切です。

給料が上がれば、それで大丈夫？

ここでまた、新しい問題が出てきます。

去年の給料が 30 万円。

今年は 31 万円。

給料が増えました。

「やった！豊かになった！」

.....とは、まだ言えません。

なぜなら同じ間に、

食料品。

電気代。

ガソリン。

家賃。

なども値上がりしているかもしれないからです。

でした。「名目賃金」と「実質賃金」

給料そのものの金額を見るのが、

名目賃金

です。

一方、

物価の変化まで考えて、

その給料で実際にどれくらいの商品やサービスを買えるのか
を見るのが、

実質賃金

です。

たとえば、

給料が3%上がった。

でも物価が5%上がった。

この場合、

給料の数字は増えていても、

実際に買える量は減ってしまう可能性があります。

だから、

賃金が上がったかだけではなく、物価に負けていないかを見る
必要があります。

実質的に使えるお金が増えると、消費へ向かう

賃金上がる。

そして物価上昇を考えても、家計に余裕が生まれる。

すると、

外食する。

服を買う。

旅行する。

家電を買う。

サービスを利用する。

といった消費へお金が向かいやすくなります。

その消費は、今度は企業の売上になります。

ここで、お金が再び企業へ戻ってきます。

ここで「好循環」ができる

流れを並べてみましょう。

適正価格で売れる

↓

粗利が残る

↓

企業利益が増える

↓

賃金が上がる

↓

家計の購買力が高まる

↓

消費が増える

↓

企業の売上が増える

↓

設備投資が増える

↓

さらに生産性が上がる

この循環が何度も回る。

これが、

私たちが探している「良いインフレ」の姿
です。

⚠ 反対に「値段だけ上がったら？」

今度は反対の場合です。

物価↑

でも、

企業利益→

賃金→

消費↓

となったらどうでしょう。

家計は苦しくなります。

買い物を減らします。

すると企業の商品が売れにくくなります。

企業も設備投資をためらいます。

これでは、

物価だけが上がって、経済の循環が弱くなる

可能性があります。

だから、

インフレなら何でも良いわけではない

のです。

🇯🇵 「インフレ文化」という考え方

今回の NIGHT FLIGHT で考えている「インフレ文化」は、

単に、

値上げに慣れましょう

という意味ではありません。

むしろ、

良い商品や技術には適正な価格をつける

↓

企業に利益が残る

↓

働く人へ賃金として戻る

↓

企業も次の投資をする

という経済へ変わるか、という話です。

つまり、

****「安さ」だけで競争する経済から、**

「付加価値」で競争する経済へ**

という変化でもあります。

💧 また「お金の血流」を確認しよう

ここでも、NIGHT FLIGHT の「お金の血流」が使えます。

見る順番は、

物価

だけではありません。

価格

↓

粗利

↓

利益

↓

賃金

↓

消費

↓

設備投資

です。

途中で止まっていないかを確認します。

たとえば、

価格↑ → 粗利↓

なら、原材料などのコスト上昇が大きすぎるのかもしれませんが。

利益↑ → 賃金→

なら、家計への流れがまだ弱いのかもしれません。

賃金↑ → 消費↓

なら、物価上昇や将来不安など別の原因を考える必要があります。

中級レベルのポイント

物価が上がった。

それだけでは、

日本復活とは言えません。

私たちが見たいのは、

適正価格で売れる

↓

粗利が残る

↓

利益が増える

↓

賃金が上がる

↓

実際に買える量も増える

↓

消費が増える

↓

次の設備投資が始まる

という流れです。

だから、

****「物価が上がった？」ではなく、**

「物価が上がったあと、お金はどこへ流れた？」**

と考えてみます。

そして次の「？」へ

ここまで来ると、次の疑問が出てきます。

企業は利益を出した。

給料も上がった。

でも、その利益は、

社員だけに行くのでしょうか？

株主にも配当が行きます。

設備投資にも使われます。

研究開発にも使われます。

税金として国にも流れます。

では――、

企業が稼いだお金は、最終的に誰のところへ行くのでしょうか？

ここから再び、

「日本経済のお金の配管図」

が面白くなってきました。

 寄り道研究所

NIGHT FLIGHT SPECIAL II 【国内編】

● 中級レベル解説でした。

さらに詳しく、インフレ・価格転嫁・企業利益・実質賃金・設備投資の関係まで見たい方は、

● 上級～一般教養レベルへ。

 次の寄り道へ、ご搭乗ください。